里山の森が拓く、たくましくやさしい生き方

**エコロジカルな生き方が、いささかブームと化している。
木、林、森を守ることは大切なことだ。
しかし、木を使わないこと、森や林をそのままにしておくことが、
豊かな自然環境をつくることではない。
森や林を使って生かすことが、
森にも林にも、人にも地球にとっても、豊かな未来を築くことにつながるのだ。
忘れかけている森林の守り方、あたりまえの使い方を、
中川さんが身も心も理性も感性も刺激しながら
楽しく教えてくれた。**

神奈川県森林総合研究所専門研究員
中川重年

●なかがわ しげとし
1949年広島県生まれ。全国雑木林会議世話人。植生や広葉樹の立地と造林が専門。最近は特に、森林を中心とした自然と人間のかかわりに関する調査研究から具体的な実践まで幅広く活動。子どもを対象としたワークショップインタープリターとしても活躍。著書には、『再生の雑木林から』『木ごころを知る』など。

森から生まれたアルプホルン

森の中のまっすぐな木は柱になりますが、曲がった木は柱にならないので捨てられてしまいます。昔は森に人の手がはいっていましたから、太くて曲がった木というのはあまりなかったのですが、いまは植えたら植えっぱなしの状態ですから、太くて曲がった木があちこちに存在します。これをなにかに使えないか。捨ててしまうのは惜しいから、楽器にすればいいじゃないか。そこで生まれたのがアルプホルン。スイスではおなじみの楽器です。そういう意味では、まっすぐの木よりずっと付加価値はつきます。まっすぐの木は、天井の梁になったり柱にしたり、何本かが合わさって一人前ですよね。でも曲がった木は1本で一人前のアルプホルンになる。大きな楽器ですから、ステージの真ん中で演奏することができます。

こんな大きな木が山に捨ててあるのは、もったいないなあと思わなければ損です。だけどそう思ったからといって、ただこれを輪切りにしてイスにするぐらいの話だと、すぐ飽きてしまう。時間をかけて作り上げていくことに、違った意味合いも出てきます。昨年の夏、長野県の木曽福島よりさらに南に位置する大桑村で、アルプホルンを作りたいという話があってお手伝いに行きました。4回ほど行きましたが、いい楽器ができましたよ。こんな活動をしていると、いろいろな所の人たちと、思いもかけない巡り合いがあって、また友だちづきあいができて、たいへん楽しいです。

さらにおもしろいのは、ただ楽器をつくれば終わりというわけじゃない。演奏することであるとか、さらにコスチューム、今日

私が着ているような、こんな赤いチョッキをつくったりします。楽器をつくって演奏する過程で、さまざまな作業が出てきて、それをそれぞれ得手の人が担当する。どの人がどういうふうに活躍できるか、頑張るか、というのはその場面場面で違ってくるわけです。1人で全部できるわけではないですから。そんな意味でいくと、学校教育のように絶対者みたいな先生が子どもに教えていくという形じゃなくて、みんなそれぞれに持っている特徴や特技を生かして、モノづくりをしていく。これはたいへんおもしろいですね。

これをきっかけに、新潟県のある小学校でもアルプホルンをつくろうということになったので、出かけて行ってお手伝いしました。テレビにも放映されましたが、雪の中で子どもたちがアルプホルンを吹いているというのもなかなかに壮観でした。アルプホルンをめぐって、さまざまな出会いがありました。ある時、結婚式でアルプホルンのファンファーレを演奏してもらいたいという方がいて、相模湖町のピクニックランドという公園の芝生の広場で、アルプホルンによる結婚式を開きました。

また、昨年の10月25日、かながわ国体のソフトボール大会が厚木の会場で開かれたのですが、このときの開会式のファンファーレを、122名で演奏しました。118本の手づくりアルプホルンと4本のスイスアルプホルン、合わせて122本で演奏しました。これは日本記録です。世界記録は200本ぐらいで、スイスでやっていますけれども。手作りのアルプホルンでの演奏ということからいくと、まずこの記録は破られないと思います。

スイス・韓国・日本合同スイス民俗音楽コンサート。日本からは、中川さんたちが手作りのアルプホルンで参加した。

そんなわけで、アルプホルンというのは、見方によれば商品価値の無い曲がった木が、生かしようによって、音楽や文化の交流につながってくるという話の一例なのです。アルプホルンとの縁もあって、これまでに3回スイスに行きました。実際に行ってみると生活習慣やものの考え方の違いが非常によくわかってきます。つい、2、3日前の朝日新聞のコラムにこんな話が載っていました。スイス在住の日本人の奥さんが、近所の人が亡くなったとき、残された子どものことを思って泣いてしまったそうです。そうしたら、翌日、ほかのスイス人に「あなた、ちょっとおかしいんじゃないんか。カウンセリングを受けたらどうか」と言われたというのです。「死」ということが、キリスト教世界と仏教世界とではまったく違っている。日本の場合には、「悲しい＝泣くこと」が死者のことを思うということだから、泣くのはふつうの話なんだろうけれども、向こうの人にとっては「泣く」という行為は、カウンセリングを受けるような、精神的になにか問題があるような意味合いになる。こんなふうにものの考え方が違っているわけです。僕もスイス人の知り合いがいますから、今度ちゃんと聞いてみようと思います。「葬式のときに泣くのか」と聞いたら、「泣かないよ、神様が面倒みてくれるから」という答えが返ってくるかもしれません。

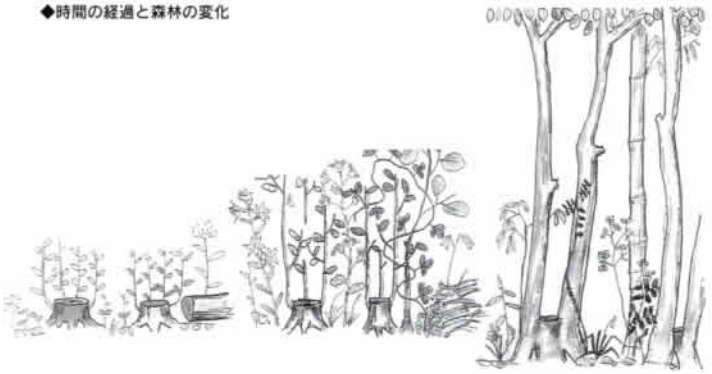
それから、スイスではダンスを踊るときに1人では踊りません。1人でやるダンスはおもしろくないのです。スイスのダンスというのは、2人で組んでクルクル回るので、そこに駆け引きがあったり、息がぴったりあったりということがあるんです。日本の盆踊りは1人ですよね。これはモンゴルの踊りとおんなじです。こんなところにも、文化の違いが出ています。

雑木林は人が育てる森

僕の専門は、雑木林の利用、管理、とくに市民による管理ということです。雑木林の歴史的なことをちょっとお話ししておきたいと思います。

雑木林というのは、人が手入れをしながら育てる森のことです。苗木を植え、木を育て、落ち葉を掻いたり間伐したりします。そして雑木林から出てくる、いわゆる林産物、生産物は森の外に運び出し、薪にしたり炭にするなど、燃料や肥料として利用してきました。江戸期元禄の時代に、柳沢吉保が「武蔵野の開墾を命ずる」と言い出したのが始まりです。埼玉県三芳町に三富新田というところがあります。ここは、昔は原野だった。武蔵野というのは原野、ススキが生えるような原っぱでしたから。この原野を、森や畑、宅地などにきちんと仕分けをして村づくりをするように命じたわけです。三富の開拓地割遺跡にはこうした状況が残ってい

◆時間の経過と森林の変化



伐採後1～5年	5～20年	20年以上

ます。そこにも雑木林の利用についての記述が出てきます。

森というのは勝手に育つ、育ち上がってくるわけではなくて、いま言ったような原野の中に、木を植えて、森をつくってきたわけです。同じような事例が、御殿場の手前の静岡県小山町にもあります。富士霊園の所には、木が筋状に植えられていますが、これは人工的に植えたということにほかなりません。みんな自然に生えてきているように思うけれども、どっこいそんなことはない。クヌギというのは昔から植林をやりますけれども、コナラというのは普通しないですね。火山灰が積もって何も育たなくなってしまったところに、畑で育てたコナラの苗木を植えて、森をつくったわけです。

20年のサイクルを繰り返す

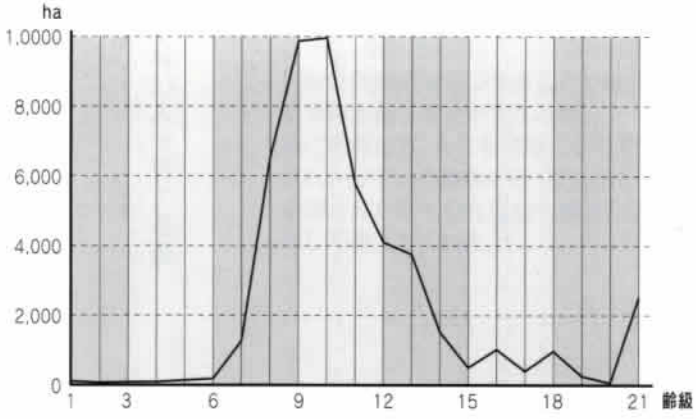
雑木林ではおよそ20年ごとに伐採を繰り返します。伐採すると、春には切り株から新しい芽が出て来ます。そして、数年後には伸びて混み合ってきた芽を切って、数を減らします。また、ササや雑草を刈り取ったり、枯れ葉や落ち葉を集めて運び出したりしながら、雑木林の手入れを行い、20年後にまた伐採する。こんな繰り返しをしています。手入れの行き届いた雑木林は、中が明るくて見通しもよく、たいへん気持ちがいいのですが、放置された雑木林は見通しも悪く、中を歩くことはできません。

放置されてから40年で、竹が生い茂るような状態になります。そうすると、森が暗くなって、常緑樹が増える。このような状態では、植物の種類は極端に減ってしまいます。ところが、それらを伐採してしまうと、植物の種類はとても多くなる。20年ぐらいのサイクルの中で植物の種類はとても多くなるのです。様々な年齢の植物が一緒くたになると、それは放置状態の雑木林ということになります。これが、神奈川県には一番多いんですけれど、手入れをすれば、そのおよそ10倍近くにも、植物の種類が増加します。

生き物の種類がたくさんあるというのは、安全パイがたくさんあるということです。たとえば、アルプホルンを作るときには、アルプホルンのアイディアを考える人、つくる人、あるいはコスチューム、洋服を作る人がいて、みんなそれぞれ得手のところを引き受ける。生き物がみんなで力を合わせて生きることの意味合いというのはこういうことなんです。だから、洋服を作るのが上手なリンドウという植物があったり、アルプホルンをつくるのが上手なアキノキリンソウという植物があったり、ひとつのたとえですけれども、そういう形で、それぞれの得手を生かして、強固なコミュニティ、集団をつくるというところがミソです。

雑木林からみる人間社会

ところが、いまの状況は古い雑木林だけになっています。ですから、出てくる種類もあまりない。普通の状態の5～10分の1の



◆神奈川県の齢級別広葉樹面積（1998年）
手入れをされていた昔の雑木林は、齢級の1～4の間でサイクルができていたので、とても豊かな林ができていた。

落ち葉のプールにダイビング。森の掃除で落ち葉をためこんだ後は、ダイビングで楽しく遊べる。

種類だけで、なんとかかんとか頑張ろうといったって、そうはいかないわけです。こうした雑木林の年齢は、だいたい40歳ぐらいです。若い雑木林は1～5歳、幼稚園の子どもと同じで、いろいろな能力を持っているし、いろいろな種類がある。黄色い花もあれば、赤い花も白い花もいろいろな花が咲く状態です。それがいつの間にか、おとなしくなっていって、暗いところに出る植物だけが出てくるという状態になる。豊かな地域の自然というのは、若い植物群落も古い植物群落も真ん中の植物群落も適当に配列されて、いろんなステージがあって、どんな植物も見られて、いろいろな事態に対応できるように設計してあるのが一番だと思います。設計というほどではないですけれども、結果的にはそういうことです。

ですから、このことを高齢社会という日本の現状に照らし合わせて、古いものだけがどんどん増えていって、若いものが無くなっていくという危険があるというふうに考えると、植物の話というのは実は人間社会のあり方みたいなところにもつながっていくということになります。

前頁のグラフは神奈川県での森林の調査結果です。齢級と書いてある数字に5年を掛けて下さい。8から9に山のピークがありますが、36年から45年までの、ちょうど中年ぐらいの森が多いということを示しています。ところが、25年よりも若い、齢級5よりも若い森林がほとんどない。グラフを見ていただければわかりますが、5から13で88%あります。5以下では0・77%ぐらいしかありません。つまり、これは就労年齢の人たちが88人いて、25歳以下の人たちが1人しかいないという、非常に極端な状態を示しているわけです。人間の寿命とは違いますので、人間が手をかけて伐採すればまた若いステージに簡単に還ります。ただし、それはその中にあるいろいろな植物が、その地域に無くなっていなければという前提での話です。すでに無くなっていた場合にはもうだめです。とういことで、実は見かけだけではなくて、その中に組み合わせる、いろいろな植物の持ち駒が必要です。そういう意味で大事なのは、大きな木の部分ではなくて、木の下の草です。下草というのは非常に重要です。環境の影響も受けますしね。風の谷幼稚園の周辺の雑木林をみんなで見に行くと、このような話が、いっそうよくわかると思います。

雑木林で遊ぼう

さて、そんなことをみんなで考え直そうじゃないかということでやっているのが、市民参加の森づくりです。七沢森林公園の雑木林ファンクラブでは、おじさん、おばさんばかりではなくて、小さな子どもたちもたくさん参加しています。森にいろいろな種類の植物を回復させるという作業を、人間の側のさまざまなステージの人たち、若い人も子どももお年寄りも、みんなが集まってやるというのは非常にいいですよね。

七沢森林公園の雑木林ファンクラブ。近くに住む老若男女が、みんなでいっしょに森の手入れをしながら、楽しさ、おいしさを味わっている。

そして、森でいろいろな遊びをしています。ピザを焼いたり、バームクーヘンをつくったり。バームクーヘンの日本記録は長さ1m20cmです。みなさんもやってみてください。1m50cmつくったらギネスブックにでますよ。

こんなふうに市民参加の森づくりをいろいろ勉強しようじゃないかということで本腰を入れている団体がけっこうでてきています。僕は全国のいろいろな人たちと森のレクリエーション研究会をやっています。島根でやった事例では、屋根に竹を使ってみました。実は昔はあたりまえにやっていた話ですけれども、屋根のもともとのパターンというのはこれだと考えます。自然の素材を使って、モノを作ってみることが大事です。その時に、竹の利用に竹馬や竹とんぼではしょうがない。竹とんぼをたくさんつくったからって森林の整備にはならないのです。竹は、たくさん使う方がいいのです。量をたくさん使うという視点が必要です。いまの社会のコンセプトは、かしこく少量使うというのがエコロジカルだとされているんだけれども、森林や里山の管理についてはまるっきり話が逆です。いままで、あまりにも何もしなさ過ぎたわけなのです。だから、とにかく量をこなしていかないと元の状態に戻りません。

この他にも、4時間でつくったピザ窯、3日でつくった神戸でのツリーハウス、6時間でつくった隠れ家や5時間でつくった長ベンチもあります。それから、「太い木でなければモノはできない」なんてことはありません。細い木でもたくさんあれば、ちゃんとモノはつくれます。子どもたちと一緒になにかモノをつくるときに、いい木、大きな木を集めないとできないなんて思わないで下さい。ヒョロヒョロした細い木を使って、家だってベンチだってつくれます。

たった6時間で作り上げた森の隠れ家。

森の手作りベンチ。細い木だけで作ったベンチ。大人が座っても大丈夫。

「燃料としての木」を考える

アフリカ、ウガンダの首都カンパラでは、夕方になると、薪でご飯を炊くために、火がつけられ煙が出ているという情景がよく見られます。

薪は、世界の木材利用の非常に大きなウエートを占めています。全世界の平均で55%、途上国は80%が、木材を燃料として使っています。日本人は、燃料に使うなんて思ってもいないので1%です。日本人は、家をつくること、紙をつくること、それが木の利用だと思っています。しかし、世界の常識から言えば、木を利用するというのは、圧倒的に燃料として使うということなのです。つまり、日本人の森に対する視点は、非常に常識を欠いているということなのです。

ちょっと大げさかもしれませんが、今日みなさんはバームクーヘンを焼いたことで、その常識をもったのだと自覚して、これから森や林、木を見るようにしてください。このことは、とても大切なことなのです。ぜひとも、子どもたちの教育において、木の利用とは家や紙をつくることだと教えないでください。木の利用について、世界の常識の最初に出てくるのは「燃料」なのです。

いま、私たちが生活する社会はゆがんできているように思います。国内の森林資源を守ると称して、身近にある里山を利用せずに、海外の森林資源を使っているというのが現実です。しかも、この話を「コスト」という意味合いからだけで語っている。つまり海外から木材を輸入するほうがコストも安くなるし、国内の森林資源は守られる、一石二鳥だという発想なのです。雑木林にきちんと手を入れ、かつ利用していくことが、森林資源を守ることにもつながるわけですが、守ることイコール手をかけない、つまり放置するという図式になっている。「脱コスト」ということを考えていかなければ、21世紀に向かって、環境に対しての明確な答えは出てこないと思います。

幼児教育の現場で、燃料としての木材、つまりクリーンなエネルギー源としての木材、という見方を、子どもたちに教えていく必要性は大きいと思います。たとえば、地震な

手作りバームクーヘンを焼いているところ。あまり炎を強くせず、ゆっくりと時間をかけて、焼きムラの無いように竹を回しながら焼くのがコツ。

どの大変な災害が起きて、僕たちが生き延びていかなければならない時を考えましょう。このような時、プロパンのカセットコンロでは、役不足なのです。昨年、阪神大震災の仮設住宅慰問で行ったときに、ほんとに往生しました。プロパンガス、それも業務用の大きなコンロを使っても、風が吹いたときに全然役に立たなかったのです。中華料理をつくろうということになって料理をしようとしたら、風が当たるもんだから思うようにできない。結局、物かげに隠れてやらなければならない。そんなことがありました。しかし、焚き火は風が強ければ強いほど、火がどんどん強くなる。ちょっとやそっとの風では消えません。

要するに、非常に洗練された、ハイテクとは言わないまでも、かなり高い技術の結晶みたいなものは、意外なところで使えないということにもなりかねない。それはたとえば自動車が水の中に落っこちて、パワーウィンドウが開かなくなるなんていう話にもつながることかもしれません。そのために、わざわざ車内に金槌を用意しなければならないということになる。だけど技術というのは、そういうものを最初から想定しているわけではなくて、だんだんと改善されていくわけですから、あまり見捨てるだけの話でもないけれども。

世界の常識を身につけるための教育

しかし、何が大事で、何が大事でないのかという話を、いままでのようにコストという観点からだけで考えていたら、これからは世界に太刀打ちできなくなってしまうだろうと思います。

バームクーヘンを作ったということは、おいしいケーキをつくったというだけのことではないのです。じつはその背景には、ほろ苦い、世界の森林資源に対する日本人の認識不足の話だとか、途上国の飢えの話だとか、そういうものをいろいろと引きずっているのです。だから突き詰めて考えると、こういう遊びの中で薪を使うくらいだったら、船ででも薪を運んで、困窮状態にある人々の暮らしに役立てることに使ったほうがいいということにもなるでしょう。しかし、今の時点でさすがにそこまでできません。例えば、お金に換えて渡すとか、支援の仕方はいろいろあります。しかし、とことんものを考えていったときには、やっぱりクリーンで安全性の高いものでもって、互いに共通する価値観のもとにプレゼントする、あるいはもらうということが望ましいのではないでしょうか。また、そういう価値観を理解し、まともにコミュニケーションできるような、そういう子どもたちが育っていかないと、困っちゃうなと思います。

例えば熱帯林の再生を図ろうと、子どもたちを連れて行ったとします。現地の子どもたちとの交流があったりして、それはそれでいいですよね。だけど、その木をどう使うのかという話になったときに、日本の子どもたちは、ためらわずに「家をつくる」、「紙にする」と言います。しかし、途上国ではそうではない。まず家の中で煮炊きをするための燃料として「木」を使う。日本人の子どもたちが、まったく悪気無しに、「家をつくる」、「紙をつくる」と言った途端、日本人はまた経済的な略奪をするのかと鼻白んでしまうということになるのでは、日本の子どもたちがかわいそうです。それは、日本の子どもたちが悪いのではなく、そうした社会状況をきちんと理解して、子どもたちに教育をしてこなかった大人の負うべき批判であり、今からでも動きを起こすべき課題なのです。

これからの世界の中で、日本の子どもたちが困らないように教育していくことは、とても大事だと思います。地震があったり、非常に大きな異変が起きたときに、救ってくれるのは木なのです。僕は、ハイテクのモノが、必ずしもわれわれを救ってくれるとは思えません。木というのはそう硬くなく、チェーンソーがあれば簡単に切れる。生の木でも燃やすことができる。そして燃やすことができれば煮炊きに使える。暮らしを支える大切で身近で安全なものなのです。

外で木を使いながら、木を燃やし、そのことの功と罪というようなことを、何度も反復学習していくことが、いま一番大事なような気がします。木を切って家をつくる、紙をつくる。これもいいです。けれども「木」＝「家」、または「紙」、という図式は、もはや通用する時代ではなくなりつつある、ということだけは知っていただきたいと思います。

バームクーヘンをつくってみよう！

フォーラムでは、バームクーヘンづくりに挑戦しました。
「ほんとうにできるのかな」という大人たちの不安の中、
まったくそんなことを気にせず、
中川先生はじめとするベテランの手作りバームクーヘン職人の皆さんは、
子どもたちといっしょに焼き始めました。
大人や大きい子は、太い竹を使って、本格的バームクーヘンを作り始める。
小さい子は割いた竹の先に、バームクーヘンの材料をくっ付けて、
そのまま焚き火の中で焼き始める。
どちらも楽しく、おいしい出来上がりでした。

●用意するもの

小麦粉（薄力粉）・ホットケーキミックス各500g
卵40個、砂糖500g、バター3箱
竹（バームクーヘン製作用）　枯れ枝（薪用）
器（ボールでもプラスチックの衣装ケースでもOK）

●作り方

★火をおこそう

森の中から、枯れ木を集めて薪を準備。火をおこしておこう。

★たねをつくろう

① 卵の白身を泡立てる。
② 卵の黄身、砂糖、溶かしたバターを加えて混ぜ合わせる。
③ ①を加え、さらに小麦粉・ホットケーキミックスを加えて軽く混ぜ合わせる。これをたねとする。

★竹を準備しよう

たねを付ける竹に、あらかじめキリで節ごとに穴を開けておく（破裂防止のため）。これを強火であぶり、汚れと油を拭き取っておく。

★バームクーヘンを焼いてみよう

① 準備した竹の表面にたねを塗る（竹が熱いうちに）。竹を回しながら塗り、直火で一気に表面を焼く。たねがたれないよう、リズミカルに!
② 少し焦げ色が付く位まで焼く。ポイントは手早く。
③ そのうえに再びたねを塗り付け、これを20回ぐらいひたすら繰り返す。
④ 最後に、回しながら竹から抜き取れば、できあがり。木の年輪みたいな、きれいなバームクーヘンができたかな?